

学生企画シンポジウム 日時：2023年3月16日（土） 10：30～12：00

「新国立競技場問題とは何だったのか」

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（「東京2020大会」）の開催からはやくも一年が経った。コロナ禍開催に対しての賛否両論がメディアを賑わせた一方で、有形のレガシーとしてのスタジアムの維持管理、利用をめぐる問題等、今後考察すべき論点は山積している。さらに、国立競技場とその周辺エリアを含む都市の再開発問題については後景に退いてしまった感がある。

東京2020大会を対象としたメガ・イベント研究の蓄積においては、都市空間の変容に伴うジェントリフィケーションや「復興五輪」、ボランティア等の論点が提出されてきた。これらの研究蓄積の重要性を認識しつつも、これらは「スタジアムの外側」の議論ではなかったかという懸念もある。国立競技場の改修をめぐるっては、デザイン案の白紙撤回があり、またデザイン決定後も無観客試合になるなど、当初の建築意図から大きくズレる形での開催に至った経緯がある。では、そもそも新国立競技場とは何を指して建築され、大会が近づくにつれそこで問題視されるトピックがいかに変化し、現在に至ったのか。こうした「スタジアムの内側」の議論から、今後の都市空間のありようと私たちとの関係を考えることはできないだろうか。本シンポジウムの基本的な問題関心はここにある。

そこで本シンポジウムでは、建築空間を社会的に考察した著作『創造性をデザインする——建築空間の社会学』（晃洋書房、2022年）の著者である牧野智和先生（大妻女子大学）と、「東京2020オリ・パラ大会で東京はどう変わるのか——東京五輪の開催と都市TOKYOの変容」（『2020東京オリンピック・パラリンピックを社会学する——日本のスポーツ文化は変わるのか』（創文企画、2020年）所収）でオリンピック開催と都市空間の変容を都市計画の観点から論じた小澤考人先生（東海大学）をお招きし、都市計画上の新国立競技場の位置づけを確認したうえで、新国立競技場をめぐる問題とは何だったのかを検討したい。その作業から、スタジアムの「内側」と「外側」をつなげるような視点からメガ・イベントを捉える議論を目指したい。

登壇者：牧野智和（大妻女子大学）

小澤考人（東海大学）

担当：学生フォーラム世話人

小石川聖（早稲田大学大学院）

宮澤優士（筑波大学大学院）

菅原大志（東北大学大学院）

スタジアム建築の社会学？
——国立競技場問題を事例にその可能性を考える

牧野智和
(大妻女子大学)

「新国立競技場問題とは何だったのか」という企画趣旨に即して、本報告ではこれまでに行われてきたスポーツ施設研究への視点の追記を試みたい。まったく見過ごされてきたわけではないものの、これまでの研究ではスタジアムという巨大建築そのもの、その物質性が正面切って捉えられることは多くなかったように思われる。新国立競技場は、これまでのあらゆるスタジアムのなかで最も問題化された、つまり人々の注目が集まったスタジアムだといえるが、この問題を捉えるにあたっては、スタジアム建築そのもののあり方を考えないわけにはいかない。そこで本報告では、新国立競技場問題を素材にして、スタジアム建築そのものについてのどのような社会学的研究の可能性があるか、半ばブレインストーミング的に検討してみたい。スポーツ社会学の立場からのスタジアム建築へのアプローチとしては「白いスタジアム」論、観戦空間論、物的文化装置論などがあるが、建築という莫大な予算のかかるプロジェクトを実現するにあたってはスタジアム建築のあり方を正当化する「レトリック／言説」が登場する局面があり、プロジェクトは多くの「利害関係」のもとで進行している。また、新国立競技場の白紙撤回に至る流れは、建築をめぐる「専門家」と社会の乖離を示しているといえるだろうし、それをめぐって建築関係者の内部でも「闘争」のようなものも起きている。このようないくつかの視点を提案し、フロアとのディスカッションのなかで、それぞれの可能性について検討・精緻化を図りたい。

都市空間としての明治神宮外苑（問題）
：「新国立競技場問題」の前提／文脈を考える

小澤考人
（東海大学）

2021年東京オリパラ大会をめぐる一連の問題群のうち、大会後もレガシーとして問われ続ける新国立競技場は、重要な核心的主題の一つである。そして新国立競技場問題の検証に際して避けて通れない課題が、その前提／文脈である「明治神宮外苑（問題）」である。本報告では、明治神宮外苑という都市空間の成立プロセスを社会学的観点から再検討することで、21世紀のオリンピック招致時の文脈を捉え直し、当面の新国立競技場・明治神宮外苑問題において抑圧されている問いを喚起・触発する。

現在、スポーツ&イベントの空間として多くの人々が訪れる明治神宮外苑は、少し考えると不思議な点が多い。なぜ聖徳記念絵画館があるのか、イチョウ並木は何のためか、なぜ“明治神宮”と称するのかなど、前提的な知識がないと位置づかない都市空間となっている。その由来を掘り下げると、①明治神宮外苑が(a)天皇制／軍国主義化と(b)西洋化に象徴される日本の国民国家形成の過程で、きわめて日本の近代化プロセスを象徴する都市空間として誕生したこと、②しかし戦後の占領政策をつうじてその意味が転換（「換骨奪胎」）され、平和国家への転生と民主主義とスポーツ・レクリエーションの意味合いを付与される中で、やがて「思考停止の空間」として残されてきたことを確認できる。

かくして2021年東京オリパラ大会を機に、施設老朽化という当面の課題を俎上にのせ、国立競技場の建替えや外苑再整備により「賑わいのある空間」へと再生する試みが見切り発車的に遂行されている。しかし、先行モデルである2012年ロンドン大会のケースとの対比を介して浮かび上がるのは、そもそもの外苑再整備の必要性や目指すべき都市空間のあり方をめぐる国民的議論（合意）の不在であり、戦略性の欠如である。

本報告では、明治神宮外苑の来し方と行く末を展望し、万博やオリンピック構想のように世界に開かれた都市空間として機能した文脈をふまえつつ、今後のあり方を自由に構想することで、「思考停止の空間」を「思考実験の場」へと転回することを試みる。